

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子 絵画修復家

27

新年、明けましておめでとうございませす。

このご挨拶をこの誌面で一体何回書いたのか判らなくなってきたほど随分長このコラムを書かせていただいています

が、今年もどうぞ宜しくお願い致します

この、新年のご挨拶をとうとう書かなくてはならなくなつた今日は12月10日。今日もぶつぶつと「信じられない。何でもう年末になつてんのよー。」と一人で愚痴を言つてました。仕事と子育てパニックで、季節感ゼロの自分にはこの間夏が終わつたような気がするのです。

——私はお正月が嫌いです。このようにいつもめっちゃくちゃ忙しいので、年賀状は書かない主義と周囲には言い切つているのですが、でも郵便受け

に賀状が入つてくるとやはり自分も書きなげやばいかなあ、と根性なく焦つてしまい、結局かなり期日の外れた年賀状を出してみたりするのです。

それにおせち料理も作らない主義、と言つていながら徐々に三が日中に中途半端なものを作つてみたりして、これも罪悪感にさいなまれる。

最大の問題は、いつもお正月は何処にも外出する先に当てがない事。なのに何かお正月らしい一日を送らなければいけないような義務感に襲われる。

こんな気分自宅でイライラしてると、突然、兄家族が決まつて大挙してやつてくるのです。沢山いる彼の子供達のお年玉の「集金」のためと、私のところでおせち料理を食べて経費節減という魂胆丸見えじゃん！

そういう事で、今回は早々と自宅からお正月は脱出する計画を練り始め、パリの親友には「今年こそ行くワ」と話していた矢先、フランスは暴動で大荒れ。とても幼児を連れて行くような場所じゃな

いかな、と考へて断念したのでした。（あー、これで畏れてる今年もまたワンプターンなお正月になつてしまいそ

う。）パリの暴動については今ごろやつと、という感じがしていました。私がいた1980年代から、パリの郊外はアラブ系の若者たちが荒れていました。むしろ随分長くこの問題を放置していたなあ、と思つています。

博愛、コスモポリタン、自由、と言う綺麗な言葉が歌われているフランスだつて、全然それは本当の顔ではなかつた。

ただし、植民地だつたベトナム、またはカンボジア系、アフリカ系からの難民を積極的に受け入れて、公共の施設で一定数の雇用を推進しているなどの点は偉い事だなあ、と、当時考へていました。

私が働いていたルーブルでも、ギャルディアン（展示室警備係）の人たちは殆どが移民でした。スラブ系、イタリア系、

アフリカ系、ベトナム、カンボジア……からの人々。私はやはりアジア人のよしみからか、エレベーターなどでいつも会う、カンボジア人のオジサンと仲良く挨拶をしたりしました。

ところで、このギャルディアン達は別名（ヌ・ギャルド・リヤン）何にも見えない）と言う別名があるほど、仕事をサボつておしゃべりに精を出していたので

す。私が当時仕事をしていたルイ16世の居室（家具の展示サロンの続く回廊）の廊下なんか、一室ごとに警備員が椅子に座つてはいるはずが、ピロイドの椅子はいつも空っぽ、誰の姿も見えない、と言う事は日常茶飯事でした。

その日、私は天井画の洗浄中で、同僚の仲良しズビシエックに「あんた水汲んできて」と言われ、のんびりブリキのパケツを吊り下げて白衣に手を突っ込んで廊下の突き当たりにある観光客用トイレに向かいました。

立派な調度の並ぶ部屋を眺めながら、大きなダチョウの羽飾りについた天蓋つ

きのベッド、暖炉の上の金時計、床には豪華を誇つた当時そのままの豪華なゴブランの織りの絨毯が……。

さて、トイレについてみて呆然。水を汲もうと思つていた掃除用の大きな陶製の洗面台の、太い蛇口のでつぺんがなくなつていて、ドゥーッ！と言う状態で1メートル近く水が吹き上がり、噴水みたいになつて。しかも、何故かこの洗面台、水はけが悪いらしく、水がもう床に溢れ始めている。

なつ！なんなんだ、これは！とものすごくビックリしてあたりを見回すと、床の隅に吹き飛んだ蛇口のねじる部分が転がっている。慌てて一生懸命これをももに戻そうとするけれど水の勢いがすごくて到底無理。すでにトイレの床は洪水状態に。だめだ、誰かを呼ばなくつては、！と廊下を走り出してもギャルディアンは例のとおり誰も居ない！

かなり走つた廊下の先に、緊急用の電話機があつた。受話器を取ろうとしたその瞬間、廊下中でけたたましく警報が鳴り出した。とうとう水が展示室の床まで及び、ゴブラン織りの絨毯をぬらしたのだ。床に張り巡らされていたセンサーが

この異常をキャッチした。

すぐに、いろいろな係官が飛んでやつてきて、人垣が出来た。私もズビシエックと一緒に後ろの方の人垣の輪の中に立つていた。（私はまず第一発見者として状況を説明はし終つていた。）

ふえー、大変だつたなあ、と疲れた気分がなかなかに放心状態で調査をぼんやり見守つた。

その時ズビが、小さい声で、「へいへい、あんた、本当に何にもやつてないんでしょね。」つて私をからかつた。

私も小さい声で「あつたりまえじやないの、冗談じゃないわよ。」と答えている間に、少し大きい声で一番偉い調査官が言った。「まあ、きつとこれは壊れてた栓を掃除係が強くひねつたからだな、それにしてもそのままおっぱらかして行つてしまふとはひどいやつだ。それが誰だか突き止めなくてはいけない。

何処を捜しても肝心の蛇口の栓が無い。犯人はそれを持って行つたんだろう。」

皆が解散して、私とズビシエックも安心して廊下を二人で歩いて戻つていった。

歩きながら、いつもの癖で白衣のポケットの手を突っ込んで、「うきや」とへんな声を小さく出した私。

なんだよお、とズビが私の方を向いた時、目の前に思わずかさじちやつたのはあの、蛇口の栓。（すつかり自分が持つてることを忘れてた。）（へオワオワオワア）と、眼をまんまるくして出したズビの声はいまだに忘れられない。

夜布団の中で思い出したりするついでをよじつてクククと笑つてしまふ。

その蛇口の栓、どうしたかですつて？それがどうもすつかり忘れてしまいました。たぶん、帰りにセーヌ河にドボン、つて捨てたのかなあ？

おわり。

（本当に私じゃありませんからね！）

次回も、まだまだ続く。ルーブル珍事件。ご期待あれ……。

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は鶴沼で修復工房を主宰。